みんぱくリポジトリ 国立民族学博物館学術情報リボジトリ National Museum of Ethnolo

An Anthropological Study on the Japan and Korea Women Diver's Use and Preservation of Marine Resources: 'Modernizadon and Tradition' Chosen

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2009-04-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 李, 善愛
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001801

日韓海女の磯資源利用と保全に関する海洋人類学的研究選択される「近代化」と「伝統」

李 善愛 宮崎公立大学

- 1 はじめに
- 2 大浦海女の磯資源利用と保全
- 2.1 大浦海女村の概観
- 2.2 大浦海女の漁業活動
 - 2.2.1 海女の年齢と漁法
 - 2.2.2 海女の季節別漁業活動
 - 2.2.3 海女の1日
 - 2.2.4 資源管理と兼業活動
- 2.3 年中行事と海女
- 3 朱田洞海女の磯資源利用と保全

- 3.1 朱田洞海女村の概観
- 3.2 朱田洞海女の漁業活動
- 3.2.1 海女の年齢と漁法
- 3.2.2 海女の季節別漁業活動
- 3.2.3 海女の1日
- 3.2.4 資源管理と兼業活動
- 3.3 年中行事と海女
- 4 日韓海女の磯資源利用と保全に関する 比較考察
- 5 おわりに

1 はじめに

古くから行なわれてきた日本や韓国の潜水漁は、技術革新や流通の発達などと、需要の拡大に伴って養殖、栽培化が進んでいる。その一方では、乱獲などさまざまな理由による磯資源の減少という問題も孕んでいる。本研究は、磯資源の増殖と減少という2つの問題に直面している中で、海女が「近代化」と「伝統」をどのように駆使して磯資源利用と保全をはかっているのかについて明らかにしたい。そのため、日韓海女村における漁業活動と祭りに焦点をあてて比較考察を試みる。

近代化とは、「複合的な概念であり、近代化の程度をはかる単一の指標は存在しない。けれども近代化の概念にほぼ共通に含意されているのは、産業化(あるいは工業化)と、合理化である」(森岡・塩原・本間 1993: 319)。一方、伝統とは、「ある集団、階層、階級が歴史的に形成し、もしくは受容し、長らく再生産し、共有している一定の思考様式や行動様式をいう」(森岡・塩原・本間 1993: 1049)。そして、「近代化は伝統が消滅し近代のみが勝ち誇る過程ではなく、同時代を地平に新と旧との新たな差異化が行なわれる過程である。伝統は消滅するのではなく、理念的に再編されるだけである。近代化は伝統を<地>に近代が<図>として描き出される「複層的」過程である」(廣松 1998: 368-370)といわれている。しかし、日韓海女は、磯資源利用や保全に「近代化」と「伝統」を海女の置かれた自然や社会、文化、歴史的状況にあわせて取捨選択して取り入れていると思われる。

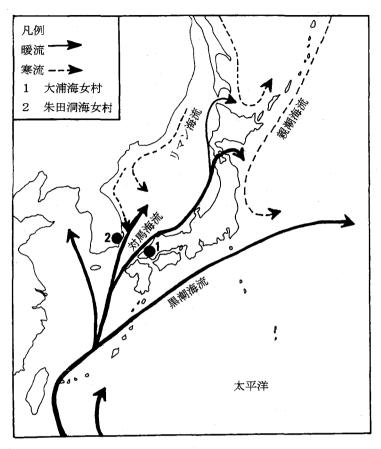


図1 日韓海女村の位置図

日韓漁村の比較研究は、主に漁村の構造と機能の仕方、漁村の共同体の存立様式、祖先崇拝の特質、民謡に関する社会学や宗教学、民俗学などの多方面から行なわれている(酒井1991; 朴光淳1991; 桧垣1991; 金宅圭1991; 文武秉1993)。ことに、日韓海女村の比較研究(左恵景2002)や、移動を基本とする移住漁民や移住海女に関する研究はあるが(李善愛2001; 野地2001; 伊藤1978),日韓海女の磯資源利用と保全に関する比較研究は、皆無に近い。そのため、本研究は、日本海に面している山口県大津郡油谷町大浦海女村と韓国蔚山市朱田洞海女村の事例を取り上げ(図1)、海女の漁業活動や年中行事を中心に比較分析する。そして、「近代化」と「伝統」とは国策によって一方的に施されるものではなく、人々が生活の中で生活のために、取捨選択することで成り立つものであることを明らかにしたい。

同じく日本海に面している両村には、約100人の女性たちが潜水漁に携わっており、 敗戦により実行できなかったが、第2次世界大戦のときには、両地域との間に直行航 路をもうける計画があったほど地理的にも歴史的にも関係深いところである。また、 大浦の人はメンタイ漁やニシン漁などのため、朝鮮半島に渡った人が多かった。その とき、網元であった人は、大ヤンバン(両班)と言われていたという。

大浦海女村に関する資料は 2001 年 9 月 5 日から 25 日まで 21 日間, 2002 年 8 月 18 日から 31 日まで 14 日間のべ 35 日間調査したものである。朱田洞海女村に関する資料は 1994 年から 1996 年にかけて調査したものである。

2 大浦海女の磯資源利用と保全

2.1 大浦海女村の概観

大浦海女村は、水深が25~40 m で大船も自由に碇泊出入できる油谷湾内に面している漁村である(図2)。集落の背後には海抜150 m 前後の丘があり、日本海から吹く西風を防いでいる。隣の村にはこの西風を利用した風力発電所がある。丘の頂上には自家消費用の作物を植える程度の畑や、大坊ダムからひいてくる400 ton の水を溜める貯蔵タンクがある。丘の裏には斜面を利用して家が南向けに密集して建っており、丘の縦と横面を切っている道は2人がやっと歩けるほど狭い。村は漁業協同組合(以下漁協と表記)を中心に東と西に分けられている10。東には大歳社、馬頭観音社、恵比須社があり、西には卯の神社、大師社、権現社があり、これらの6社を6つの地区がそれぞれ祭っている(図3)。

村の入口には駐在所があり、村内には酒屋が2軒、雑貨屋2軒、理容・美容室が3軒、畳屋1軒、保育所1軒、高齢者交流センター1軒、食堂1軒、診療所1軒、韓国釜山からウニやノリなどを取り入れて商売をしている小売店が1軒ある。人口は油谷町役場資料によると、2001年8月現在、336世帯、男性400人、女性426人で合わせて826人である。しかし、空き家を除けば、実際の人口は約700人である。大浦の職業別人口構成は、2001年9月の聞き取り調査によると、生産活動人口の約8割が漁業をし、残りはサラリーマン、船員、小売業、行商などをしている。

大浦海女の潜水漁法は、1428年に筑前の鐘崎から鐘崎屋久兵衛という人が大浦に移住して、潜水技術を伝えてから始まった(油谷町略年表委員会 1997: 12)。鐘崎海女は日本海沿岸の 22 ケ所で毎年、漁を行っていた。

大浦村の多くの人が檀家になっている向徳寺の住職の話しによると,「向徳寺には鐘崎や兼崎姓の墓石が約40基あり,一番新しい墓石の銘は,明治21年である」という。 大浦海女村は鐘崎海女の枝村の1つであった(鐘崎漁業誌編纂委員会1992:236-238)。 大浦では海女を海女士(アマシ)といい,江戸時代藩主の特別の庇護をうけ,藩主の前に出るときは海女の正装で,腰にアワビガネを刺して出ることを許されていた。大浦の人は今でもこのことに誇りを持っている(油谷町史編纂委員会1990:716-717)。

大浦漁協の資料によると,漁船は 1-3 ton の船が全体漁船数の 6 割以上を占める。

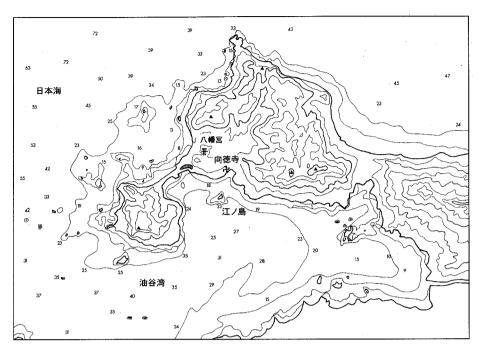


図2 油谷周辺の水深図

主な漁獲魚種はタイ,アジ,ブリ,サワラ類など約19種である。漁獲高は鮮魚類が全体収入の約7割,貝・海藻類が約3割を占める。漁種別経営体者数は、潜水漁が3割でもっとも多く、その次が一本釣、磯立網漁などである。従業者数も潜水漁がもっとも多く、その次は磯立網、沖立網漁である。漁種別生産がもっとも高いのも潜水漁であり、その次は沖立網、まきさし網、一本釣漁などである。潜水漁に使われている船は2人で操業を行なう場合は0.5 tonから1 tonの船になり、5、6人の場合は5 tonの船になる。

大浦海女村の漁場の長さは川尻岬から俵島まで約4kmである。組合員は283人おり、全組合員数の約8割の235人が正組合員である。2001年9月現在、大浦の海女の数は118人であり、正組合員として登録されている海女の数は61人である。海士は12人で、全体海女数の約9%を占めている。

大浦漁協の下部組織には海女方船頭組合、磯立網組合、沖立網組合、一本釣組合の4団体がある。分銅海女(後述)とかかわりのある海女方船頭組合員には38人がいる。海女方船頭組合長は大船頭と呼ばれ、海女の不満をよく仕切り、組合員をよくまとめられる人、アワビ・サザエの市場価格や天候に詳しい人が船頭たちの推薦によって選ばれる。大船頭の下には副船頭1人、会計1人、世話人として東村と西村からそれぞれ3人で合わせて8人がいる。これらの人たちは天候が良いと、早朝に集まって潮の流れや風の向き、波の高さなどをみて海女の操業の可否を判断する。三役の中、1人

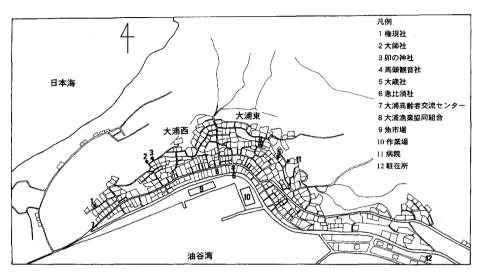


図3 山口県大津郡大浦海女村

でも反対者がいると、操業はできなくなる。

2.2 大浦海女の漁業活動

2.2.1 海女の年齢と漁法

海女の平均年齢は約62歳で、60代がもっとも多く全体海女数の約4割を占める。 次は50代が3割、70代2割で、40代、30代は1割未満である。男性が潜り出した のは1980年代中葉頃、ウエットスーツが導入されてからである。海女の水揚げは20 日おきに委託販売手数料などを除いて漁協から現金で渡される。

漁に用いる浮きは車のタイヤを利用したタンポで、カチ海女(後述)やオケウケ海 女(後述)が使っている。耳栓の材料はイワレンゲ、ホンミミタマ、スイバ、フタン 草、ヨモギ、粘土など簡単に手に入れるものである。イワレンゲは、ガスの火に焼い て柔らかくして丸く揉んでから使う。

海女の漁法にはカチ、オケウケ、分銅の3つのタイプがある。カチは磯から泳いで行って浅いところで潜り、ウニやサザエなどを主にとっている。年齢的には60代の海女にもっとも多く、全体海女数の約5割を占める。しかし、オケウケや分銅海女も船頭の都合によりカチになるときもある。また、海士の主な漁法はカチか分銅である。

オケウケは 5,6 人の海女が漁場まで船で移動し、サザエやアワビなどをとっている。オケウケ海女船は 3 隻があり、海女は船頭に運賃として 1 日で 1 人当たり 5 千円を払う。その代わりに船頭は海女たちに昼食のとき、果物や菓子などを提供する。船頭は海女たちの漁獲物の持ちあげや海での移動を手伝う。年齢的には 50 代の海女がもっとも多く、全体海女数の約 1 割を占める。

表 1 分銅アマ (海女・海士) 数と船頭との人間関係 (2002年9月現在)

人間関係/同乗するアマ数	1名	2名	3名	合 計
妻	28			28
隣人	1			1
息子の友人	1			1
母	2			2
娘あるいは息子	3			3
婿	1			1
妻とその姉妹		2		2
妻と叔母		1		1
妻と姉妹		2		2
娘と婿		1		1
妻とその弟		1		1
妻と娘と妹			1	1
合 計	36	7	1	44

(大浦漁業の資料や聞き取り調査により作成)

分銅海女は1-3人の海女が同じ船に乗り、18 kg の分銅を持って交代で潜り、主に アワビやサザエをとる。年齢的には60 代や50 代がもっとも多く、全体海女数の4割 を占める。船頭は海女が海底に着いたのを見計らって器械で分銅を巻き上げる。分銅 が上がってくると、待っていた次の海女がそれを持って海に潜る。潜っていた海女は 自力で上がり、船の横に吊り下げている竹竿を把って次に潜るまで休む。船頭に対す る運賃はその日にとった漁獲物で払う。アワビやサザエは漁獲の4割を、ウニは3割 を船頭に渡す。

1隻の船に1人の海女が乗る場合の海女と船頭の関係は、夫婦である場合が約8割、残りは母親、娘あるいは隣人であり、海士の場合は息子あるいは婿である。2人の海女が乗る場合、海女は妻と妻の姉妹、妻と叔母あるいは妻と船頭の姉妹、娘と婿、妻と妻の弟である。3人の海女が乗る場合、海女は船頭の妻、娘、妹である(表1)。分銅海女の船頭は総船頭数の約9割が夫であり、残りは父親、息子、妻の父親などの家族や親戚関係にある。その理由は、操業の危険さもあるが、経済的な理由がもっとも大きいと思われる。

1975年まで分銅海女船は15隻があり、3-5人の海女が手巻きにより交代で潜っていた。しかし、1978年頃からはアワビ・サザエの販売単価が高くなり、分銅巻きが手巻きから器械巻きに変わった。そのため分銅海女は漁獲物の3、4割という船頭への運賃負担を減らし、稼ぎを増すため、夫を船頭にした夫婦単位の操業形態に変えた。それにより、分銅海女船が20隻に増え、3年後の1981年には30隻に激増して1989年には45隻に、2001年は46隻までとなったが、2003年9月現在は船頭の高齢化で42隻に減った。

2.2.2 海女の季節別漁業活動

大浦海女の主な漁獲物は約13種類である。季節別漁業活動をみると、春の3月から5月の間は、イワノリやワカメ、カジメ、フノリ、ウミソウメン、フトモズクなどの海藻やバフンウニ漁が行なわれる。ワカメはほとんど自家消費されている。天然のワカメは1966年頃まで商品価値が高く、採取したワカメは海女たちが油谷町の水岬、伊上などの農村に行商で売りに行き、知り合いの農家で米と交換した。干したワカメ4kgは米45kgに交換するほど商品価値が高く、半年間の生活ができるほどワカメは大きな収入源となった。そのため大浦では、年1回にワカメの胞子が岩によく付着できるよう、岩掃除を行なっていた。この岩掃除のことをモズリという。

しかし、ワカメの養殖が始まり、毎年1月4日から商人が三陸地方の養殖ワカメを加工して売りに来る。そのため、3月からとれる大浦のワカメは商品価値が無くなり、主な収入源は、ワカメからアワビやサザエ、ウニに変わった。ワカメはアワビなどの餌になる大切な資源でもあり、現在は自家消費用として、3月の節分が過ぎてから5月末までの間に1、2回しかとらない。干したワカメは涼しくなった9月半ば頃、ワカメの葉、茎を刻んでみりん、砂糖と混ぜて網の袋に入れて味噌漬けにする。そして3、4ヶ月後に食べる。ほかに、粉にしてワカメむすびで利用する。

夏の6月から秋の10月までは、アワビ漁やサザエ漁、ウニ漁が行なわれる。アワビ、サザエの漁期は、ウエットスーツを着るようになってから乱獲を防ぐため6月から10月までに制限されるようになった。漁は8日おきに入札をしてから行なっている。入札には三重や大阪、長崎、下関などから来た仲買人が参加している。夏はテングサやボケ、オキュウト、イギス、オゴなどの海藻がとれる。テングサは安いため、自家消費用にしている。フトモズクはゆでて酢味噌、酢醤油で食べる。オキュウトは火にかけ、コンニャク状にして酢醤油や酢味噌で食べる。ボケはオキュウトを造るとき入れる場合もある。ウニ類にはムラサキウニやアカウニ、バフンウニがあり、カチ海女の主な漁獲物として箱詰め、瓶詰めに加工して個人で販売している。

秋の11月1日から12月20日までのアワビの産卵期は、禁漁期となる。一方、11月は約3日間ヒジキとりが行なわれる。ヒジキとりは自由で、とれたヒジキはほとんど自家消費にするため、ヒジキの若芽が出たときに干潮を利用して歩いてとりに行く。アワビの禁漁期が終わり、12月21日から3月末まではアワビやサザエ、ナマコとりを1、2回に行なう。

2.2.3 海女の1日

凪ぎの日の朝6時頃、大船頭が放送で海女方船頭の三役を集まらせる。三役の会議で出漁が決まると、船頭たちは真水の用意をする。その間、海女は昼食の準備や水鏡の曇りをとるためのヨモギを用意し、ウエットスーツなどを入れたカルイカゴを背

負って家を出る。朝8時に「本日は沖に行って下さい」と大船頭が放送で知らせると, 船の上で出漁の仕度をして待っていた海女船が一斉に漁場に向かって出始める。船の 中で海女は恵比須社に向かって海上安全を願う。そして身体に澱粉を塗り, ウエット スーツに着替える。

12 時から 2 時まで昼休みをとり、また 2 時から 4 時まで合わせて 5 時間漁をして 港に戻る。ウエットスーツ姿は人の前で見せるには恥ずかしいので、帰りの船の中で 用意していた真水で身体を洗ってから着替えをする。

一方,カチ海女はグループで軽トラックやリヤカーで道具を運び,個人は車を利用して8時前に漁場へ移動する。操業時間が終わると、家に戻って身体を洗ってから漁獲物を量りに魚市場に持って行く。漁協前の魚市場では事務員が2つのグループに別れてサザエは大きさ別に、アワビはアカとクロの種類と傷もの別に分けて量り、漁獲量を書いた伝票を海女に渡す。その間、船頭たちは船を洗った後、家に帰って風呂に入る。海女は家に帰ってすぐ、夕食の仕度をする。夕食を食べてから天気予報や雲の動きをみて明日の漁の可否を予測する。そして10時頃に寝る。

2002 年 8 月 26 日に 36 隻の海女船が出てアワビは約 350 kg, サザエは約 3200 kg の 水揚げがあった。アワビをとった海女は 118 人であり、サザエは 84 人である。

2.2.4 資源管理と兼業活動

アワビ・サザエ漁はウエットスーツが導入されてから禁漁期がもうけられたが、漁が3日間続いた場合も、その次の1日を休むようになった。また、漁期の間の土・日、祭日、葬式や運動会などの村の行事があるときや、アワビ、サザエの入札単価が安いときも漁を休み、資源保護と海女の体力の回復をはかる。捕獲してよいアワビの大きさは10 cm 以上である。

また、20年前から年2回、下関にいるモグリ3人を雇い、ウニやアワビの稚貝を 放流している。これら稚貝や、10 cm 以下のアワビをとる海女は、1ヶ月間の操業停止となる。そのうえ、アワビやサザエなどは漁協が委託販売しているため、抜け売り しないように規則で定められている。規則を守らなかった場合、1回目は3日間操業 停止となり、2回目は1ヶ月間、3回目は1年間操業停止となる。

一方, 1960 年代後半に長崎県西海の漁師たちが 2, 3 隻の船でアワビの密漁に盛んにきたこともあり, 現在も土・日は船頭 5 人組が交代で夜 9 時から午前 12 時まで漁場を監視している。

大浦漁協の 1975 年から 2000 年までの資料によると、海女の年間平均操業日数は約45日間である。年間平均生産高が高いのはアワビやサザエ、ウニの順である。たとえば、アワビの年間平均総生産高は 7,900 万円で、年間平均生産量は 12,000 kg であり、1 日の平均漁獲量は約 267 kg である。

大浦海女の漁法別年間平均収入はカチが約41万円, オケウケが約110万円, 分銅が約220万円で, 分銅海女の平均年収は, カチ海女の約5倍, オケウケ海女の約2倍である。海士の漁法はカチや分銅がもっとも多い。1人当たり年間平均生産高は約150万円である。生産高が150万円以下の海女は,全体海女数の約65%(81人)を占め,150万円以上の海女は約35%(40人)を占めている。年間平均生産高が高い海女の年齢層は、60代が最も高く、その次が50代である。

兼業活動をする海女は、全体海女数の約2割を占める。兼業活動海女数の7割以上はカチ海女であり、2割は分銅海女である。また、兼業活動をする海女数の約6割はパートで、残りは行商などである。パートはアワビ・サザエ漁期の6月から10月までの間は仕事を休む。パート先は同じ町内にある人丸、長門、栗野の水産加工場であり、65歳まで働くことができる。働く時間は朝8時から午後5時までで、時給625円である。兼業海女数の2割を占める行商は、夫婦あるいは海女1人でする。海女1人の場合は、汽車やバスを利用してウニ漬け、乾物、鮮魚売りをするが、夫婦の場合は、軽トラックで売りに出ている。行商は主に漁の下手な海女がするが、稀に上手な海女もする。

海女の配偶者の職業は、全体海女数の6割以上が漁師で、約2割が死別者であり、 その他は船員、無職、未婚者などである。漁師の3割以上は一本釣漁、磯立網漁、養殖に携わり、2割は船頭をしながら一本釣漁、磯立網漁などを並行している。

2.3 年中行事と海女

大浦海女村の年中行事には、海上安全や大漁を祈願する祭りが多く、その日は漁を休む。そして漁期の間、祭りなどで漁を休む日は約20日間である。海女の漁業活動と直接、間接的に関わりのある1年間の行事をみると、以下のとおりである。

まず、1月1日は船頭たちが祝餅一重ねをもって八幡宮の氏神へ初参りをする。それから1月の吉日に、海女の初集会が開かれる。初集会日には船頭たちが氏神の八幡宮を参ってから、海女たちと一緒に作業場に集まる。そのとき、大船頭は操業時間を守ること、小さいアワビやサザエはとらないよう注意を促し、ワカメ採取日を決める。

4月15日は春祭の日で、青壮年団が八幡宮で神楽を行ない、豊漁や豊作を祈願する。 4月21日は大師祭があり、弘法大師を供養する。毎年交代で務める当番は、地区の 人から集めた10万円相当の現金で菓子を買い、参拝に来た人々に配る。また、弘法 大師信仰者も個人で菓子を用意して、家を訪れる人に配る。弘法大師を信仰する家は 20軒ほどある。また、海女方船頭たちも作業場で弘法大師を供養して村人に菓子を 配るため、その日は菓子を貰う人々で賑わう。また、5月13日は岬区域の人たちにより、 岬神を祭り、海上安全と大漁を祈願する。

7月24日(毎年旧暦6月15日)は龍神祭という海女祭りである。祭りの日は旧暦の大潮のときで、海女は4日間漁を休む。この日は作業場に龍神の大きな掛け軸をか



写真 1 龍神祭での大浦海女 (撮影 李善愛)

けて祭壇を作り、漁協が招いた向徳寺の住職が大磐若経をあげて、海で亡くなった海女たちや捕獲採取されたアワビ・サザエの霊を慰める供養をする。また、頭や肩などが痛い海女には住職がその部分に大きな磐若札で3回軽く叩き、痛みを払う儀礼を行なう(写真1)。一方、この日はごぜん堂とも称して、八幡宮より青壮年団が神様を担いで帰り、大浦東と西にそれぞれ10ヶ所を廻る。その翌日の7月25日(旧暦6月16日)から3日間にかけて宮司は村人の家を1軒ずつ廻り、神棚の前で家内安全や健康を祈願する。また、船頭たちは筑紫にある宮を参り、「おんころころ」と唱え、海女たちの目がよくみえるように祈願する。その翌日(旧暦6月17日)は船頭たちが江尻にある宮参りをし、海女たちの耳が悪くならないように祈願する。さらにその翌日の7月26日(旧暦6月18日)には、村内の馬頭観音社を参り、1年間の健康と家内安全を祈願する。7月29日のなごしの日は団子をもって祖先の墓参りをするため、また、海女は漁を休む。さらに、8月14日~16日の新盆や旧盆の日は海女漁を休む。

9月14日~15日は海女漁を休み、船頭は八幡宮に参拝する。青壮年団により八幡宮で神楽を行ない、豊漁や五穀豊穣を感謝する。それから日曜日には小学校で向津具小・中学校の合同運動会があり、海女漁を休む。子供の数が少なくなってから幼稚園生から小・中学校の運動会を合同で行なうため、海女たちは前日から御馳走を作って家族全員が子供や孫たちを応援しに行く。

9月18日は近くの人丸村の祭日であるために、海女漁を休む。9月23日の彼岸の日は海女漁を休んで墓参りをし、祖先の供養をする。また、この日は権現社地区の人々が向徳寺の住職を招き、権現神を祭る。権現神は咳きを止めるのに御利益があるとい

う。

10月1日は八幡宮司により天神を祭るため、10月卯の日の2日、14日、26日は、宮司により卯の神を祭るため、海女漁を休む。10月10日は隣村の川尻村にある日吉神社で祭りがあるため、海女漁を休んで船頭たちが参る。10月13日~14日は漁の神様を祭る恵比須祭がある。当日は漁を休んで漁船全部が大漁旗をたて、青壮年団が八幡宮から担いできた神輿を船に積んで弁天神社がある江ノ島まで交代で参り、豊漁や海上安全を祈願する。

12月は船頭たちが集まり、次の大船頭として適任者である人を推薦する。大船頭は新年度1月の大安の日を撰んで海女の初集会日を決める。また、船頭たちと一緒に次年度の大船頭になる人に頼みに行く。大晦日には床の間に船下を飾る。

3 朱田洞海女の磯資源利用と保全

3.1 朱田洞海女村の概観

蔚山市朱田洞海女村は半農半漁村である。4つの自然集落が山裾から海岸沿いまで畑や田圃を挟んで南北に長く広がっている。村の中を走るバス道路沿いに,漁村契事務所や洞事務所(区役所)が位置し,近くに敬老堂,教会や寺,小学校,共同作業場,雑貨店などが並んでいる。

また、村には守護神を祀るコルメギ堂が4つの集落の海岸部と山裾にそれぞれ1ヶ所ずつ8ヶ所がある(図4)。元々コルメギ堂は、集落ごとに1ヶ所あったのが、人

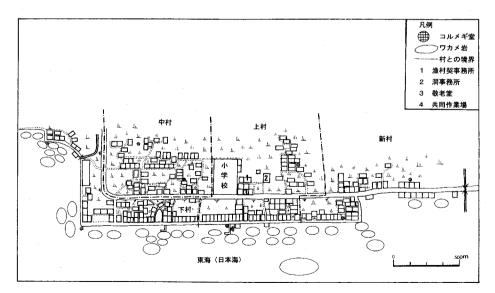


図 4 蔚山市朱田洞海女村

口や所得の増加に伴って、漁業区と農業区でそれぞれ祭るようになった。しかし、最近は村の守護神を祭るのを迷信と考える傾向が強く、コルメギ堂の回りはカモを飼うなど聖なる場所としての認識は薄れつつある。そして、1年間不幸なことがない男性が祭日の祭官を務めるが、その人は祭日まで清めのためタブーが多くて避けたがる人が多い。

村の南端には陸軍の部隊があり、造船所、自動車工場などの大きな工業団地が面している。北端は海岸線に沿って隣の漁村が続いている。海岸は水深 5-10 m 前後のところで、岩礁が散在しているため船の出入りには不便で、港が発達していない。しかし、岩礁海岸はワカメ漁場として最適であり、海女のよい操業場となる。漁場の長さは約3kmである。

1994年10月現在,村の総世帯数は299戸,人口は1,043人,うち男性が509人,女性が534人である。1995年洞事務所によると,生業活動は農家がもっとも多く総戸数の約32%を占める。次は漁家が約31%,半農半漁家が22%,その他が15%を占める。1960年代までは農業が中心で,漁業は小規模であった。しかし,1980年代から高度経済成長とともに漁家が急増し,現在は農業と漁業の就業人口がほぼ同率になっている。

漁船は全部で36隻あり、1-5 tonの無動力船が18隻、0-1 tonの動力船が16隻、1-5 tonの動力船が2隻である。漁業形態は、延縄、刺網、流刺網、定置網、三角網、角網、カゴ網、釣漁など多様である。捕獲魚種は30種類を越えている。ことに、捕獲されるスズキ、コノシロは、ほとんど村内にある約40軒の刺身専門店で消費されている。刺身専門店の約3割は漁師が直接経営している。

朱田洞の潜水漁は、19世紀末頃、出稼ぎに来た済州島の海女が村の女性たちに教えてから始まった。潜水漁には潜水器漁と素潜り漁がある。潜水器漁は漁村契が男性のモグリを雇い、素潜り漁を行なわない深いところで、ナマコとムラサキウニなどを捕獲している。1995年現在、漁村契の台帳に登録されている海女の数は約100人である。しかし、潜水漁を主な生計手段としている現役の海女数は合計81人である。主な漁獲物は、巻貝類を中心とした貝類が14種類、海藻類16種類、その他7種類で、計37種類である。

漁村契の運営は、契長が決めた会計1名、監事2名、総代3名を中心に財務管理運営、漁獲物の入札、漁期、漁場決定などをする。漁村契の年間収入は、全体収入の約9割が海女の支払う入漁料、ワカメ岩漁業権行使料及び漁獲物の委託販売による収益である。漁村契の収益金は正月と盆に、漁村契員に分配される。漁村契員160人は、全員正組合員であり、そのうち海女は66人である。

3.2 朱田洞海女の漁業活動

3.2.1 海女の年齢と漁法

海女の平均年齢は約56歳で,50代がもっとも多く全体海女数の5割以上を占める。 次は60代が2割以上,40代が約2割を占める。その次は,30代,70代の順である。

海女のうち,30代から70代までの海女35人について,彼女らが海女を始めた時期に関する聞き取り調査によると,1930年代に海女になった人は1人(3%),1940年代には2人(6%),1950年代は13人(37%),1960年代は14人(40%),1970年代は4人(11%),1980年代は1人(3%)である。ここからみると,朱田洞の女性が潜水漁を始めたのは主に1950年代と1960年代である。

最初は小遣いを稼ぐためであったが、農業の他に就職の機会がほとんどなかったので、女性たちは生活のため本格的に潜り始めた。そのうえ 1970 年代には、日本向けの輸出品として海産物の需要が拡大し、さらにウェットスーツが導入されて長時間の操業が可能となった。

漁期になると漁村契長は、仲介人を集めて自由入札を行ない、漁獲物の種類や単価と期限を契約する。その期間は1ヶ月単位とする。海女の水揚げは1ヶ月後に委託販売手数料などを除いて漁村契から現金で渡される。水揚げの委託販売手数料は、漁獲物の種類によって異なる。たとえば、アワビやムラサキウニは漁獲高の6割、サザエやナマコは5割、バフンウニは1割が委託販売手数料として漁村契の収入となり、その残りが海女の収入となる。しかし、ワカメは海女各人が自由販売し、すべてが海女の収入となる。

海女の漁法はほとんどカチであるが、ムラサキウニ漁期には一部の海女が船で漁を行なう。10人前後の海女が1組になって1隻の船を雇う。運賃は海女1人当たり約2千円である。船主は海女の夫の従兄弟か、海女と義兄弟関係にある人である。ムラサキウニ漁に使われる船は全部3隻である。浮きはスチロポール製の上に布をかぶせて使い、耳栓はガムをよく利用する。漁具はタライを利用して頭上運搬するか、リヤカーやバイク、クルマなどを利用して運ぶ。

3.2.2 海女の季節別漁業活動

朱田洞海女の漁獲物は、商品価値の高いアワビやサザエ、ウニ、ワカメ以外はほとんど自家用として消費されている。自家用の漁獲物は漁村契の指示と関係なく、自由 にとることができる。

季節別漁業活動をみると、春の3月から5月の間は、ワカメやウガノモク、ヒジキなどの海藻とりをする。ことにワカメは商品価値が高く、ワカメ漁を行なうときは採取から乾燥まで天候のよい日を撰んで行なう。ワカメは生か、乾燥させてスープにして食べる。ワカメスープは普段でもよく食べるが、ことに誕生日や出産後の産婦が必

ず食べるものの一つである。ワカメは血行をよくし、乳の出をよくするからという。さらに、赤子の長寿をつかさどる産神への供物としても欠かせないものである。そのため、養殖より天然産ワカメを好む人が多く、商品価値がアワビより高い。ワカメは2、3日間干して海女個人の知り合いをとおして販売するか、市場に卸している。漁の合間には、畑を耕してトウガラシ、タマネギなどの苗や田植えの準備をする。稲苗作りは血縁、地縁関係のある海女7、8人による協同作業で行なう。

6月からはアワビやムラサキウニを中心にサザエ、イガイ、カキ、ナマコ漁を行ない、アワビは7月まで、ムラサキウニは8月まで捕獲する。アワビは滋養食材として粥にして食べ、貝殻は螺鈿の材料とするため、集めておいて買いにくる商人に売る。一方、畑ではトウモロコシやトウガラシの収穫が行なわれる。さらに、7、8月は夏休みを利用して来る観光客を対象にして飲食店や民宿を開く。

9月はアワビの稚貝を放流して10月までアワビの禁漁期間とし、バフンウニ漁を行なう。バフンウニはムラサキウニに比べて商品価値が高く、ムラサキウニとともにほとんど日本へ輸出している。盆の翌日の旧暦の8月16日は、漁村契事務所に漁村契員全員が集まり、1年間の決算報告とともに、ワカメ岩の配当くじ引きを行なう。それから、トウガラシなどを収穫し、再び畑に肥料を入れ耕し、ハクサイ、ダイコンの種を播く。

11 月は、バフンウニやアワビ漁を行なう。また、天気がよく、潮の流れが良い日は、ワカメ岩の掃除作業が海女によって行なわれる。ワカメの種子が岩に付着しやすいように、他の海藻を削り落とす作業をする。ワカメ岩の掃除作業は、潜水技術とともに移住してきた済州島海女によって始まった。一方、田圃では稲刈りをし、畑ではダイコンやハクサイ、ニンニクなどを収穫する。また、冬の間に食べるハクサイやダイコンなどの漬け物作りをする。そして、12 月から 2 月まではアワビやバフンウニ漁を中心に、アメフラシ、タコ、ナマコ、イワノリ、アオノリ、ユナ、ヒジキ、イソモク、ウガノモク、ミル、ヤヤモリなどを捕獲採取する。

3.2.3 海女の1日

操業日や操業場所は、漁村契長が天候や入札単価を参考にして決め、当日の朝7時に放送で村人に知らせる。しかし、海女たちは長年の経験により潮の満ち引きや風、雲の動きなどで漁がある日を大体予測している。漁のある日の朝は、放送で操業場所を聞いてからウェットスーツを着替えるなど、漁に出る仕度をする。海女は操業場所に集まって漁村契長の合図により、朝9時に岸から一斉に潜り始めて、午後2時に漁を終える。海女は潜水漁を農業と並行しているため、漁期が播種期と重なるときは午前3時に起き、夫と一緒に畑を耕してから漁に出る。

漁がある日は、漁村契と契約した仲買人は海女たちが海から上がるのを待っている。

海女はとってきた漁獲物をその場で漁村契の人に渡し、漁獲量を書いた伝票をもらって家に戻る。しかし、バフンウニの場合は、家できれいに身をとってから漁村契の作業場に持っていく。手間がかかるため、親類や家族が全員手伝いをする。家に戻った海女はすぐ夕飯の仕度をし、10時頃に寝る。

3.2.4 資源管理と兼業活動

年間平均操業日数は約50日間である。入札単価や天候の良い日を選んで潜るが、 漁村契員の中、葬式や結婚式があるときは、天候がよくても漁を休む。

アワビは8cm以上の大きさのものをとる。8cm以下のものは選別して海に戻す。 アワビ漁期以外にアワビをとると、1年間潜水漁が休止させられ、ワカメ岩の配分と 漁村契から出る年2回の配当金を受ける資格が無くなる。

漁場は4区に分けて輪番に利用している。しかし、漁獲物の入札単価が高いときは、漁獲物がよくとれて潮の流れがよいところを選ぶ。年間平均総生産額が高いのは、アワビ、ワカメ、バフンウニの順である。アワビの年間平均総生産高は約1,700万円である。漁に参加する海女の人数は約57人で、平均操業日数は18日間である。アワビ漁は深く潜る技術を要するため、漁に出る海女の数は少ない。しかし、操業日数が多いのは、平均単価が1kg当たり約7,000円で商品価値が高いからである。アワビの1日漁獲量は約171kgで、年間平均漁獲量は約3.078kgである。

ワカメの年間平均生産額は約1,500万円である。漁に参加する海女の人数は約82人で、年間平均操業日数は6日間である。ワカメは年間平均単価が約8,000円で最も商品価値が高く、潜らなくても簡単に大量にとれるため、参加人数は多いが、操業日数は最も少ない。

バフンウニの年間平均生産額は約1,200万円である。浅いところでも簡単にとれるので、技術のレベルや年齢に関係なく、大勢の海女が参加することができる。平均単価は約5,000円であり、参加人数は約99人で、操業日数は約17日間である。バフンウニの1日当たり平均漁獲量は約198kgで、年間平均漁獲量は約2,800kgである。

海女の潜水漁による年間平均生産高は、約40万円である。生産高が40万円未満の海女は海女全体の約6割を占め、40万円以上の海女は約4割を占めている。年間平均生産高が高い海女の年齢層は50代と40代の海女である。

朱田洞海女は潜水漁と並行して農業,露天商,飲食店,会社員など多様な兼業活動を行なっている。ことに農業は兼業活動をする海女数の約4割で最も多く,次は露天商が約2割,小売業,飲食店などの順である。海女の夫の職業は,死別者が最も多く全体海女数の約4割を占める。次は会社員で約4割を占め,漁業が約1割,その残りは無職、農業などの順である。

3.3 年中行事と海女

朱田洞海女の年中行事の中に漁とのかかわりがあるのは、旧暦の1月15日に行なう豊漁祭のみである。20年前までは漁村契員全員が参加し、巫女を招いて盛大に祭っていたが、経費が膨大にかかるため、現在は漁村契長が自宅で祭りを行なうだけである。漁村契長は、豊漁祭の1週間前から自宅の玄関の前に注連縄をかけ、葬式などにも参加せず心身を清めて当日、祭りを行なう。一方、済州島出身の海女はこの日に個人的に海へ行き、栗をまいて1年間の豊漁と海上安全を願う人もいるが、朱田洞出身の海女はしない。

4 日韓海女の磯資源利用と保全に関する比較考察

以上で述べた大浦海女と朱田洞海女の漁業活動を項目別に比較してみると (表 2), 次の3つの類似点と相違点にまとめることができる。

まず、類似点の第1は、1つの集落に100人前後の海女集団が存在していることである。これら海女集団の存在は、漁場がよく漁獲物が豊富であるでもあるが、両方とも1970年代から磯資源の商品価値や需要の拡大、漁船の機械化、ウエットスーツの導入などの漁具の近代化によるのが大きな理由であると思われる。ことに朱田洞は大都市に隣接して潜水漁のほかに副業の機会が多いため、潜水漁と兼ねることができる。

表 2 大浦海女と朱田洞海女の漁業活動の比較

項目	大浦海女村	朱田洞海女村
立地条件	漁村	大都市に隣接した半農半漁村
海女の数	118人	81 人
平均年齢	62 歳	56 歳
漁法	カチ,オケウケ,分銅	カチ
漁獲物の種類	13 種	37 種
主な漁獲物	アワビ,サザエ,ウニ	ワカメ,アワビ,サザエ,ウニ
漁場の長さ	4キロメートル	3キロメートル
年間平均操業日	45 H	50 日
1日操業時間	5時間	5時間
兼業	パート,行商	農業,小売り,飲食店
夫の職業	漁師,死別	死別,会社員,漁師
1人当たり年間平均生産高	150万円	40 万円

第2は、大浦海女や朱田洞海女両方とも漁獲物の禁漁期、大きさの制限、稚貝の放流などをとおして資源の保全をはかっていることである。秋道はこれを「海のしきたりの生態的な機能」(秋道 1995: 188-206) と呼んでいる。

第3は、移住海女の影響により潜水技術が伝わったことである。前にも述べたように、大浦海女は15世紀頃、福岡県鐘崎海女の移住の影響から始まり、朱田洞海女は19世紀末頃、済州島海女の移住の影響により、潜り始まったものである。

次は相違点について述べたい。第1は、立地条件の違いである。大浦海女村は漁村として農村や他の漁村と隣接しているが、朱田洞海女村は半農半漁村として大都市に 隣接している。このような立地条件の違いは、漁業形態や海女の生活にもかかわって くる。たとえば、大浦海女は専ら潜水漁だけに携るが、朱田洞海女は潜水漁を兼業活動の一部として行なっている。また、大浦海女はカチ、オケウケ、分銅という多様は 漁法を駆使しているが、朱田洞海女はカチという1つの漁法で、4区の漁場を輪番に 利用している。さらに、大浦海女の夫の職業はほとんどが漁師であるが、朱田洞海女 の夫の職業は会社員が多い。そのため大浦海女は「専漁集団」といい、朱田洞海女は 「兼漁集団」と特徴つけることができる。

実際に、大浦海女は、短期集中的に操業を行ない、多い年間平均漁獲量や漁獲高をあげている。たとえば、「専漁集団」の大浦海女の年間平均操業日数は約45日間で、1人当たり年間平均総生産高は約150万円である。一方、「兼漁集団」の朱田洞海女は、長期分散的に操業を行なう。年間平均操業日数は約50日間で、1人当たり年間平均総生産高は約40万円²⁾である。また、大浦海女は、朱田洞海女より平均年齢が高い。大浦海女は60代が多く、朱田洞海女は50代が多い。さらに、大浦海女の年間平均操業日数は、朱田洞海女より約0.9倍少ない。しかし、1人当り年間平均総生産高は、大浦海女が朱田洞海女の2.7倍となる。

第2は、海女の祭りとのかかわり方の違いである。「専漁集団」としての大浦海女は、海上安全や大漁を祈願する豊漁祭、海で亡くなった海女や捕獲物の供養のための龍神祭や、周辺村の祭りの日にまでも漁を休むほど、祭りを重んじている。6月から10月までの漁期の間に祭りによる休漁日は、約20日間を占める。一方、「兼漁集団」としての朱田洞海女は、海上安全や大漁を祈願する豊漁祭は、費用の問題や迷信と考える傾向により、ほぼ行なわないため、祭りのため漁を休むことはない。

1つの漁法で天候さえよければ4区の漁場を順番に利用しながら一年中操業している朱田洞海女に比べて、大浦海女は3つの漁法で漁場を棲み分けし、5ヶ月間という限られた漁期にしか操業しない。そのため、20日間の祭日は、磯資源や海女の健康保全の機能をもしていると思われる。大浦の海女達は、1ヶ月以上天候が悪く潜れない日が続いてやっと漁に最適な天候になってもその日が祭りの日であると漕らない。祭りの日に潜ると、神様が怒ると信じているからである。秋道はこれを「海のしきた

りの社会的な機能! (秋道 1995: 188-206) と呼んでいる。

第3は、移住海女の信仰形態の伝来の違いである。大浦海女の信仰形態は、福岡県 鐘崎海女の信仰形態が潜水技術とともに大浦に伝わり、大浦海女村の年中行事の中で 取り込まれ、伝統としての「海のしきたりの社会的な機能」を果たしている。鐘崎漁 業誌編纂委員会によると、「鐘崎海人が移住地に祀ったのは、海中に棲む竜神と海石 に依りつくエビス神であり、上位の神については、その土地の産土神をそのまま崇敬 した。大浦では、みずからのアイデンティティにかかわる竜神は境内の一角に、エビ ス神は集落内に祀った」という(鐘崎漁業誌編纂委員会 1992: 236)。しかし、朱田洞 海女の信仰には、潜水技術を伝えた済州島海女の信仰形態がほとんど伝わっていない。 土地の産土神さえも迷信と考え、祭らなくなりつつある。

以上から「専漁集団」としての大浦海女は、磯資源利用と保全において「伝統」的な要素を大いに取り込んでいるのに対して、「兼漁集団」としての朱田洞海女は「近代化」の要素を大いに取り込んでいるということができる。

このような日韓漁村の違いについて、酒井は、日本の「地区住民のほとんどは同じ地区内の寺の檀家であり、氏神の氏子であるため、寺院や氏神に関する行事による檀徒や氏子の全村的協力は部落会や、漁業組合の統合にもブラスに機能することになる。一方、韓国漁村社会で特に重視されてきたのは「長幼の序」「孝道」「男女の性区分」で、このうち長幼の序の倫理の徹底のため、年代相互間を疎遠して部落的統合にマイナスに作用するという。同族及び親族的集団結合の強さは村落共同祭よりも家族レベルの祭儀や門中祭儀がはるかに多い。従って韓国漁村においては、儒教的規範が生活構造と社会構造の両面において、生活原理として基本的意味をもっている。日本人の生活にも儒教的原理の影響はあるが、比較的弱く、血統の原理よりも生活の場を優先させ、もっぱら「家」の経済的繁栄に重きをおいている」(酒井 1992: 33-60)という。

また、桧垣は日韓の祖先崇拝の特質について、「韓国の儒教式祖先祭祀は、道徳主義的に実践されるべきものであり、義務として履行されねばならない。それに比べて日本の仏教と習合した祖先崇拝では、祖霊を神霊として礼拝・供養することによって、その加護・御利益を期待、使用しようとする。それゆえ、韓国の儒教的先祖祭祀を先祖祭祀といえば、日本のそれは祖霊信仰ということができる」(桧垣 1992: 664-717)という。

5 おわりに

本稿で述べてきたように、海女の磯資源利用と保全において、大浦海女と朱田洞海 女の近代化と伝統の取り入れ方が少し異なっている。大浦海女は、朱田洞海女が迷信 と考える祭りを重んじる伝統的な要素も大いに取り入れている。反面、朱田洞海女は、 伝統的な要素より近代化の要素を大いに取り入れている。つまり、大浦海女集団は伝統的な要素を選択し、朱田洞海女集団は近代化の要素を選択することでそれぞれ磯資源利用と保全をはかっていると思われる。その理由として考えられるのは以下のとおりである。

大浦海女村は、15世紀から明治時代の19世紀まで鐘崎海女の長年の移住が行なわれる中で、鐘崎海女の磯資源利用と保全に関する伝統が根付くことができた。それに大浦海女村は、漁業以外の兼業の機会がほとんどなくもっぱら漁業のみで生活をせざるをえない。そのため、大浦海女集団は磯資源利用と保全に「伝統」を重んじる選択をした。

一方, 朱田洞海女村は, 済州島海女の移住が19世紀末頃から20世紀後半まで短い間で行なわれ, 済州島海女の磯資源利用と保全に関する伝統があまり根付かなかった。それに, 朱田洞の大勢の女性達が潜水漁を始めた時期は, 韓国政府が工業化に拍車を加えた時期と重なっている。そのうえ, 潜水漁は農業と並行していたが, 後に観光客を対象とする小売業なども兼業とする生活を営む中で, 朱田洞海女集団は磯資源利用と保全に「近代化」の要素を重んじる選択をしたと思われる。

両海女集団の磯資源利用と保全形態の違いは、資源観に対する考え方にも現れる。 大浦の海女は海女士として誇りを持っており、曾孫代にも潜水漁で生活ができる漁場 を残そうとしている。そして、漁具の近代化が進んでも磯資源利用に対する神・仏へ の信仰が深く絡み合わされている。そのため、大浦海女の神・仏への信仰は、磯資源 利用と保全における「海のしきたりの社会的機能」として強く作用している。しかし ながら朱田洞海女は、古くから潜水漁は賎しい生業だという社会的認識もあり、だれ も娘や息子を自分の後継者にさせたがらない。また、潜水漁が盛んな済州島は馬しか 住めないところという地域認識もあったせいか、済州島海女のアイデンティティとし ての信仰形態は、移住先の朱田洞で根付くことができなかった。

韓国の行政は資源を取り尽くさないよう、漁獲物の大きさを制限し、稚貝を毎年放流するなど資源保全のための制度的措置を実施していても、海女自身は、次の代も漁で生活できる漁場を残そうとは誰も思っていない。また、海の神への信仰は迷信と考えているため、朱田洞海女の磯資源利用と保全における「海のしきたりの社会的機能」は、ほとんど作用していない。だからといって朱田洞海女が乱獲をしているわけでもない。そのため、「専漁集団」としての大浦海女は「伝統」を選択し、「兼漁集団」としての朱田洞海女は「近代化」を選択することで、磯資源利用と保全をはかっていると思われる。大浦海女の資源観は、近代化を追従し、長年続けられてきたしきたりや信仰を迷信としている朱田洞海女の資源観とは対照的である。

このような大浦海女と朱田洞海女の磯資源利用と保全における「近代化」と「伝統」は、行政により上から押し付けられて成り立つものというより、海女の置かれている

自然や社会,文化,歴史的な環境の中での選択により編み出されるものであると考えられる。本研究は、移住により形成された海女の資源利用と保全に関する日韓海女の比較研究としては初めての試みである。そのため本稿で提起した仮説を検証するためには、多数の事例を吟味する必要があるだろう。また、日韓両国における移住海女の移住地での適応形態の解明についてはこれからの研究課題としたい。

謝辞

本研究は2002年3月20日に国立民族学博物館共同研究会「先住民による海洋資源利用と管理」にて口頭発表した要旨をまとめたものである。発表や論文執筆のチャンスを下さった研究代表者の岸上伸啓助教授をはじめ、出席者の方々から貴重なコメントをいただいた。心から感謝の御礼を申し上げたい。

注

- 1) 太陽が昇るところを軸に最初にできた村を東村,次にできた村を西村,その次にできた村を中村という(伊藤 2003)。
- 2) 1995年の日本円に対する韓国ウォンのレートは約8倍で、1人当たり年間平均総生産高の40万円は、約320万ウォンに相当する。

文 献

秋道智彌

1995 『海洋民族学――海のナチュラリストたち――』東京:東京大学出版会。

桧垣 巧

1991 「祖先崇拝」増田庄三編『日韓漁村の比較研究――社会・経済・文化を中心に――』 pp. 664-712, 京都: 行路社。

平田順治

1991 「日・韓社会民俗動態の比較研究」増田庄三編『日韓漁村の比較研究 - 社会・経済・文化を中心に』pp. 503-568, 京都: 行路社。

李 善愛

- 2000 「韓国のお産文化」『宮崎公立大学人文学部紀要』7(1):175-196。
- 2001 『海を越える済州島の海女:海の資源をめぐる女のたたかい』東京:明石書店。
- 2003 「海女の磯資源利用と信仰」『神奈川大学日本常民文化研究所論集 19 歴史と文化』19: 609-642, 東京:平凡社。

Ii, S.

2002 Women Divers of Jeju Island cross the Sea: According to the Case of Jeju Island Women Divers in Korea and Japan. The First World Jamnyeology Conference: Values of Women Divers and their Cultural Heritage, pp. 130-140. Jeju: World Association for Island Studies.

伊藤 彰

1978 「鐘崎海人の移動」国分直一編『論集・海上の道』pp. 199-230, 東京:大和書房。

2003 「鐘崎の海女の歴史とくらし」宗像市教育委員会『むなかた海人文化シンポジウム』, 宗像市。

左 恵景

2002 「일본 쓰가지마의 '아마'와 제주 해녀의 비교 민속학적 고찰」『한국민속학회』(「日本 菅島の海女と済州島との海女の比較民俗学的考察」韓国民俗学会『韓国民俗学』)36: 229-270。

Johannes, R. E.

1982 Implications of Traditional Marine Resource Use for Coastal Fisheries Development in Papua new Guinea. In L.Molauta, J. and W. Heaney (eds.) *Pernetta Traditional Conservation in Papua New Guinea*: Implications for Today, pp. 59-72. Port Moresby: The Institute of Applied Social and Economic Research.

掛谷 誠編

1995 『講座地球に生きる2 環境の社会化』東京:雄山閣。

鐘崎漁業誌編纂委員会

1992 『筑前鐘崎漁業誌』福岡:鐘崎漁業協同組合。

金 宅圭

1991 「韓国東海沿岸の民俗祭儀――民俗の班礼化現象に関する一つの試論――」増田庄三編『日 韓漁村の比較研究――社会・経済・文化を中心に――』pp. 609-642, 京都: 行路社。

森岡清美・塩原勉・本間安平編

1993 『新社会学辞典』東京:有斐閣。

文 武秉

1993 『제주도 당신앙 연구』(『済州島の堂信仰研究』)済州大学校(博士学位論文)。

波平恵美子

1978 「水死体をエビス神として祀る信仰——その意味と解釈——」『民族学研究』42(4): 334-355。

廣松 渉 ほか編

1998 『岩波哲学・思想事典』東京:岩波書店。

野地恒有

2001 『移住漁民の民俗学的研究』東京:吉川弘文館。

大津郡志編纂委員会

1949 『大津郡志』山口県大津郡。

朴 光淳

1991 「漁業共同体――慶北・巨逸洞と島根・笠浦地区を中心に――」増田庄三編『日韓漁村の 比較研究――社会・経済・文化を中心に――』pp. 422-449, 京都:行路社。

酒井俊二

1991 「生活構造と社会構造」増田庄三編『日韓漁村の比較研究――社会・経済・文化を中心 に――』pp. 33-60, 京都: 行路社。

瀬川清子

1970 『海女』東京: 未来社。

高橋憲昭

1991 「宗教構造の特性」増田庄三編『日韓漁村の比較研究――社会・経済・文化を中心に――』

pp. 643-663, 京都:行路社。

宇野正人

2002 『祭りと日本人』東京:青春出版社。

渡部重行

1995 『共生の文化人類学』東京:学陽書房。

油谷町史編纂委員会

1990 『油谷町史』山口県油谷町。

油谷町略年表調査委員会

1997 『改訂版 油谷町略年表』山口県油谷町。